11 月 19 日の説教要旨　　「はじめにあったのは」　　山本一牧師

ヨハネによる福音書 1 章 1～14 節

●詩人の吉野弘さんは「祝婚歌」という詩の中で、「完璧なんて不自然なことだと、うそぶいているほうがいい」と綴っておられます。人は完璧なのは神様だけ、と人の弱さを受け止めて歩んでいく時に、また互いに弱さを受け止め合って生きる温かな愛を胸に育む事ができます。吉野さんは戦後の混乱期に「人を愛し助け合う」という熱い「初心」を抱きつつ、決して頑張りすぎず、人間としての弱さは優しさにつながることを覚えつつ詩を描き続けられました。

●今日の聖書はヨハネによる福音書の書き出しの部分です。「初めに言があった。言は神と共にあった」と始まる格調高い詩の形で書かれたこの箇所は少し難解でもあります。ここに出てくる「言」という文字は元々の聖書では「ロゴス」というギリシャ語が使われており、その意味は 60 個以上にもなります。東北のケセン語で福音書を訳された山浦玄嗣さんはこの「言」を「神の思い」と訳されました。

「はしめにあったのぁ　神様の思いだった、思いが神様の胸にあった。　その思いごそぁ神様そのもの、はしめのはしめに神様の　胸のうちぬぃあった物」

私達が言葉を発したり、行動を起こす時、その最初に必ず初心（思い）があるように、神様のこの世への愛や期待のこもった熱い思いが全てに先立ち神の胸にあり、その思いが人となってこの世に現れたのがイエス・キリストであり、イエス様は神様の思いそのものだったのだと訳したのです。

イエス様を通して、人々はその神様の熱い思いに触れ、弱者や虐げられた人々が光輝いて生きるようにされました。そしてその神様の思いは、たとえ人間がイエス様を退け、十字架で殺してもなお、決して変わらなかったのです。

●私たち人間が物事の初めに抱く熱い思いは熱しやすく、冷めやすいものですが、神様の抱く全ての被造物への思いはそうではないのです。それは世の初めから永遠に続く偉大なものです。

私達は人間ですから神様のような完全な思いや愛を持ち続ける事はできません。そして神様もそのような完全さを私たちに望んでおられるのではないのです。計り知れない神の愛と思いを知り、それを証することを望んでおられるのです。

●山浦さんの訳された「光やぁ、人の世の闇照らしてだったのに、闇に住む人ぁそのことに気が付かねぇでだったんだ。」という言葉は私たちの胸に響きます

私たち一人一人が、神様が天地創造の初めから持っておられた、その思いに気づきを与えられる事できるように。そして、その愛を胸に大切に秘めて、完璧な歩みは無理だと自覚しつつも、それぞれに主の愛を証する歩みを続けていくことができるようお祈りします。